
PIECES

泉水慶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PIECES

【Nコード】

N2418Y

【作者名】

泉水慶

【あらすじ】

自らに宿る破壊衝動に苦しむ辻堂翔。かつての師の恩に報いるため、“大切な人と現在”を捨てた黛秋房。人格の二重性に怯える新川敬。本来、交わるはずの無かった三人の道が重なったとき、物語は除々にその姿を現す。それらの一つ一つの出来事、想いや人が、まるで完成された一枚絵に欠けたPIECEだったかのよう。

衝動と始まり

持て余していたんだ。

俺の中にある、発狂した獣のような、獰猛な衝動を。

いや…この言い方は、もしかしたら間違っているかもしれない。

そこには確かに理性があるように思えたからだ。

俺の中には、丹念に積み上げたもの、もしくは、形の整った物を破壊したいという願望があったのだ。

その得体の知れない何かは、飢えた獣のように目を光らせながら、破壊する常に対象を、そしてその機会を探していた。

築き上げた信頼。人と人との関係。

一個の完結した肉体。生命。

美しいものを、

完成されたものを、

完結した存在を、

取り返しのつかないまでに…破壊しつくしたい。

例えば、

教室の机を、

黒板を、

窓ガラスを、クラスメイトを、教師を。

この俺が、

この手で、

自ら壊したい。

時折生まれるこの感情は、年月と共に頻度を増し、強化された。それを妄想によって紛らわす空しさと、実際に自分が行動に及んでしまうのではないかという恐怖。

まるで天秤の両端に置かれた二つの感情がバランスを取るように…
しかしそんな危ういバランスは、何かの拍子に崩れてしまうことを予感していた。そして、そのキツカケを、俺は心のどこかで心待ちにしていたのだ。

その日は突然訪れた。

高校の帰り道の土手を歩いているときだった。

犬の甲高い鳴き声が聞こえ、川原へ目をやると、地面に膝をついた老人と、犬の首輪を掴んだ若い男の姿が見えた。

遠目にも分かる不穏な雰囲気、俺は鼓動を早めながら、土手を降りていった。

老人が何かを叫んだが、聞き取れなかった。若い男は、犬を連れ去ろうとしているようだ。老人の横に、ステッキが投げ出されているのが見えた。

老人が俺の姿を確認し、助けってくれといった。あれは私の犬なんだ、取り返してくれ、と。

俺の鼓動はますます早まった。草むらへと消えていく男の後姿を見て、無意識に落ちていたステッキを拾った。

男は背後に迫る俺の存在を認識すると、ゆっくりと振り向いた。左手は、変わらず首輪をつかんでいる。よくみると、右のポケットに、ナイフの柄が突き出しているのがわかって、ギョツとした。ステッキを握りなおす。犬は変わらず鳴き続けている。

「なんだ、お前は」

表情の無い顔で、男は問う。

喉がカラカラに渴いていた。何かを口に出したら、震えてしまうのではないかと思った。

「その犬。どうすんの」

声を絞り出す。

「お前に関係あるか？」

男の問いに答える前に、俺は一回、ゆっくりと息を吸い込む。

「そんな犬切り刻むぐらいならさ……俺にすれば」

男は俺を数秒睨みつけた後、犬を首輪ごと放り投げ、ナイフを抜いた。

犬は地面を転がると、俺を迂回して後方に走り去った。それと同じ時に、俺はステッキを振り上げて、男に向かって走った。

俺が思い切り振り下ろしたステッキが、男の肩に命中した。男が突き出したナイフは俺の頬を掠めた。

男はうめき声をあげて、肩を抑えながら這い蹲った。まだナイフは離さなかった。

その瞬間、俺の中の獣は完全に目を覚ましてしまった。

俺はナイフを握った男の手を思い切り踏みつけた。ステッキを、男の背中につきたてた。そして、殴った。ステッキがへし折れるまで殴った。男の頭を蹴った。

男が何かを口にしようとしたときに、顔を思い切り踏みつけた。気づいたときには、ボロ雑巾のように横たわる男が目の前にあった。

そして、老人も犬もすでに姿を消していた。

もう辺りは暗くなり始めていた。微かに残った赤い光を反射させる川を横目に、俺は家路についた。

どうやって家に帰ったかも覚えていない。自分の外側にある、何もかもを見てはいなかった。自分の中に存在するこの衝動についてはかりを考えていた。

頬についた傷をなぞる。まだ、確固とした痛みを感じた。

俺の中の猛獣は、餌の味を覚えてしまった。
突き進むしかない。

あの男もまた俺と同類だったのかもしれないな、という考えが一瞬よぎった。

破壊への訳の分からない衝動も、破壊の後の空虚さも…
多分、もう俺は、停まれない。

自分の中に眠る暴力生が恐ろしかった。

どれだけ考えても、人を傷つけることが怖いという気持ちと、こんなにも残忍な気性が俺の中に同居してしまっているのか、わからなかった。

もう戻れない…誤魔化すことは出来ない。

一線を越えてしまった。

昨日までの俺には、もう戻ることが出来ない。

俺にわかるのは、それだけだった。

俺はどこへ向かう？

このまま破滅への道をいくのか。

それとも…

誰かが、俺を止めてくれるだろうか。

辻堂翔

往復書簡、宛先不明、行き道（前書き）

往復書簡、宛先不明、行き道

もう、五年も前になるんですね。

あなたに出会ったのは、私がこの街に来てまだ半年ほどの、そう、あれは秋の始まりの季節でした。

何か夢や目標があるわけではなく、ただ必要に応じて、そして周りに流されて東京にやってきた私は、いつだって不安や、自分の自信の無さを口にしていた気がします。

そんな私に、あなたは言いましたね。

君は絶対に大丈夫だって。焦る必要はないって。

どうしてって聞き返す私に、あなたはこう答えました。

両手を広げて、片方の手のひらを私の頭へ掲げて。

大きな手で私の頭を乱暴に撫でながら…

君が俺の手の届く場所にいるうちは、何も心配いらなくて。

どこからそんな自信が来るのって、私、笑いました。

そんなことを言う人、私、他に一人も知らなかった。もちろん信用だって出来ませんでした。

私は私の道を行くしかないし、人は結局一人でしょう？

自分の定められた道をそれぞれが行く。誰もが一人で。自分の足で。

人と出会うということは、一瞬、交わるというだけのこと。

あなたの道と、私の道が交差する場所で、時を同じくして、偶然…そう、奇跡的な確率の下で出会っただけ。

一時的なこと。だって、人は旅の同伴者を得ることを許されていない。

そんな風に考えていました。

最後に会った日。あなたは言いました。

俺は君にとって止まり木みたいな存在だって。

君は、少し、羽を休めただけ。

力を溜めて…俺を離れていく。

決まっていたことだ。わかっていたことだ。

だから、もうここにいる必要はない。

巣立つ日が来た。

君は遠くまで行けるよ。俺が言うんだから間違いない。

もう、君は行かなくてはいけない。

私、あなたに聞きました。あなたはどうするの？

木はどこにも行けない。朽ち果てるまで。

ここに立っている。

あなたは病室の窓を向いて、答えました。あんなに太くてしつかりした腕も、ガツシリした背中も、まるで窓の外に広がる枯れ木みたいに細かった。今にも折れそうだった。あの時、笑おうとしたんでしょう？うまくいかなかったんだね。

もし運命や必然というものがあるとして、あなたは幾度もそれを捻じ曲げてきたように思うのです。今なら、そう思えるのです。先ほどの言葉と矛盾していますね。私らしくないかもしれない。あなたの影響なのかな。

だから…

今度は、私が運命をねじ曲げる番だと思つのです。

あなたが私にしてくれたように。

君は相変わらず子供だねって、あなたは笑うでしょうか。

私、あなたを探します。

きつと、探し出します。

あなたに会いに行きます。

菊川夕紀

往復書簡、帰り道

君の手紙を読んだ。

宛先の記されていない書簡がなぜ、現在俺の手元にあるのか。どのような方法で入手したのか、君は不思議に思うだろう。

そこには複雑な経緯があり、特殊な経路があるのだが、ここで君に伝えたいことの本質と関係はない。

君は、結局俺という人間の性能を把握出来なかった、というだけのことだ。

決して人間性の話ではない。

これは、俺が巧妙に隠し持った機能の一つであり、君にあえて見せてこなかった側面の一つでもある。

君の前に現れたのは、常に複数存在する俺の人格の一部分だった。よく覚えておくといい。人間はこうも複雑なのだ。

蛇足だが、人と人が分かり合うとは、全てを知り尽くすこととイコールではない。今後の君の人生において、必ずしも他者に理解を求め過ぎないことだ。

大事なのは、未知のモノを受け入れる器を磨いておくこと。

君を前にすると、ついつい語りすぎてしまう。世話を焼きすぎてしまう。こつやって文字を記す作業をしていると、ますます顕著になる。

その理由の一つとしては、俺に残された時間がわずかなことを、君と会った時点で自覚していたことがある。

そう、俺は病に侵されていた。だが、それは今となっては瑣末な問題だ。

俺は、誰よりも自分のことを考え、自分を中心に生きてきた人間なのだ。

そして君も、自覚しているのだろうか、利己的な人間だ。君が必要としたのは、俺という人間そのものではない。

自分の不安定なエゴを保つために俺を利用した。不思議なのは、そんな君を、俺が長い間、そばに置いてきたことだ。

残りわずかな人生を自覚したときに、誰かを、無償の行為として力になりたいと思った…そんな安易な解釈で語ってくれるな。

それは世間に流布された都合のいい物語の一つに過ぎない。そんなモノで人を語る人間になるな。

思い起こせば、俺は何度も君に手を差し伸べた。

君のあらゆる行為を許した。

君の周囲に、常に目を光らせていた。

なぜだろう。俺には明確な理由がわからなかった。

俺のような人間には、非常に珍しいことだ。

君と最後に会った日から、幾夜を費やして考えた。

辿り着いた答えは、あきれるほど単純で、ありふれたモノだった。

俺は、君が泣く姿を見たくなかったのだ。

涙で濡れた頬を、歪んだ眉を、強く結んだ唇を…

初めて会った日、君は泣いていた。覚えているだろうか。

君はきつと、今、泣いているのだろうか。

それが俺には我慢ならないのだ。君を泣かせる存在を。つまり、自分自身を。

俺は…

君を苦しめる存在より、君が強くなることを願っている。

君が自分の足で歩いていけることを、
君の涙を拭いてくれる人間が現れることを、
君の笑顔を、
君の幸せを、

祈ってる。

意識が朦朧としている。

俺の言葉はまだ、理性を保っているだろうか。

もう、こうやって自分の体で、手で、文字を書くことはないだろ
う。

おそらく、近い将来、ペンさえも持てなくなる。

君は大丈夫だ。

俺は、俺という人間を過小評価しない。

俺の目に映った君は、輝いていた。

君は、それだけのものを培ったんだ。

それだけのものを持っていた。

今も、これからも変わらない。そう思う。

俺はもう必要ない。必要なんて、最初からなかった。

必要としたのは、俺のほうだった。

さようなら。

俺を探すのは諦める。

この手紙が君に届く頃、おそらく俺は、既にこの世にいない。

君と過ごした日々は、本当に、本当に、
楽しかった。

俺の人生で、その言葉を使えるのは、
君といた日々が全てで、他には、何も無い。

ありがとう。

黛秋房

第三者の手記

女のマンションに届いた書簡が、確かに女の手に渡ったこと、そして女が目を通したことを確認したところで、俺の仕事は終了だった。

望遠レンズから覗いたカーテンの隙間から、女を監視していた。一度、手紙に目を通したあと、ひとしきり泣き、その後、何度も読み返した。

ここは女のマンションが確認できる付近のビルの一室。この仕事の為に借りたものだ。

請け負った仕事内容は、以下の三点。

1、依頼者の死まで、女の行動を監視し、目立った動きがあれば報告する。

2、依頼者の死の連絡を待つて、手紙を女のマンションに届ける。

3、女が手紙を受け取ったことを確認する。
こういったコストや手間にかかる上に不確実性の高い仕事を請け負うことは少ない。しかし、それが依頼者の要望だった。カメラや盗聴器の類の使用は許されなかった。そして、報酬は破格と言えるものだった。

これは仕事を引き受けたことと直接関係はないが、依頼者とは短くはない付き合いがあった。一時期、同業者だったこともある。

この世界の住人にしては、公平さと誠実さを持った男だった。誰よりも不器用な男だった。

そして、超が付くほど優秀な男だった。

電話が鳴る。

「もしもし。あたしだけだ」

ああ…今、一仕事終えたところ。

「お疲れ様。何？元気ないんじゃない？」

上客が一人死んだ。いや…

「え？死んだ？」

…あとでかけなおす。

電話を切る。携帯をフLOORリングに放り投げる。

上客？違うな。

仕事仲間だった。でもそれだけじゃない。

俺は…

あの男が好きだった。

憧れていた。

ずっと、心のどこかで…

友達になりたいと思っていた。そんな奴は初めてだった。

「俺の友達が、死んだんだ」

そう口にしたとき、寂しさと虚しさが体の中で膨張し、少し現実感が薄れた。しばらく胸に手を当て、自分の呼吸に意識を置く。

立ち上がらなければ。仕事の後処理がまだ残っている。

再び、望遠レンズを覗くと、部屋の窓際の机には読んでいた便箋が残されたまま…

女は姿を消していた。

円藤正継

夢の余韻と既視の感覚

窮屈なマンションの一室。

少し気分が悪かった。肩がこって、目が腫れぼったい。頭に鈍い痛みを抱えていた。首を振れば、その痛みがさらに強く自覚される。時計を見る。時刻は正午過ぎ。ソファに横たわり目を閉じる。部屋の照明や音響機器のスイッチを切ろうと思ったが、億劫に感じた。

俺はいつの間にか眠りについていた。

気づけば白い壁、床、天井で構成される、長方体の空間にいた。部屋というより、箱に近い印象だ。窓もドアも無いからただだろう。部屋には大小様々なスピーカーが無造作に置かれている。音は鳴っていない。

ふと、嫌な予感に襲われる。腹の底から湧き上がって、体の隅々まで拡散し、その瞬間にはもう、原型が掴めない。両手を握ると、汗ばんでいた。

突如、既視感に襲われた。反射的に、これは何度も超えてきた感覚だと自分に言い聞かせる。耐えることが出来る範囲だと、心の中で呟く。

頭が痛い。呼吸が浅い。この部屋の酸素が薄いのだろうか？

突如、電話のベルが鳴り響く。辺りを見回すと、足元に携帯電話が落ちている。拾い上げ、耳に当てる。

その瞬間に、部屋中のスピーカーから音楽が流れ始めた。誰からの着信なのか。音楽がうるさくて、相手の声が聞き取れない。

音量はどんどん上がっていく。

俺はスピーカーの裏に回り、ケーブルを一つ一つ引き抜いていっ

た。しかし、音は止まない。

俺は携帯を耳に強く押し当て、もしもし、もしもし、と繰り返す。部屋を見回すと、音量を上げたスピーカーは小さく振動を繰り返している。まるで部屋全体が揺れているようだ。

眩暈にも似た感覚に、足元がふらつき、片手を床についた、その瞬間…受話器の向こうから、かろうじて聞き取れる言葉があった。

「絶対に殺す」

目が覚めた。

夢での感覚は体に余韻を残したままだ。夢と現実の境界。それにしてもおかしい。夢から覚めたのに、音楽が鳴り止まない。

上半身を起こす。

その音楽は現実からのものだと気付いた。音響機器の電源を切る。そしてソファから落ちた携帯電話を拾い、ディスプレイを覗きこむ。

不在着信、一件。

その番号を何度も確認した。俺は嫌な予感が当たっていたことを知った。

呼吸を一つ。

何度も超えてきた感覚だ、耐えることが出来る範囲だ。俺は夢と同じ台詞を呟いてみた。

奴は俺を知ってしまったんだな。

俺がしたことを、知っている人間を放っておくわけにはいかない。もちろん、逃げることは出来ないだろう。

俺が俺である限り、それはいつまでも、どこまでもついて回るものだから。

ならば選択肢は二つ。

このまま奴に噛み殺されるのを待つか…

俺が食い殺すか。

何度も繰り返し返してきたように。

選択の時間が迫っている。

いつものように。

辻堂翔

眠れない夜

眠れない夜。

カーテンの隙間から差し込む月の光が、僕の盛り上がった毛布の上に、まるで山間を流れる川みたいにウネウネした道を作っている。どうやっても眠れる気がしないけど、無理矢理に目を閉じてみるでも、頭の中はぐるぐると余計なことを考えてしまう。体がムズムズして、僕は寝返りを打つ。

さっきの光の道は、形を変えてしまったかな。

ほら、こうやって、無駄なことばかり考えてる。でも僕は、こういう夜にどうしたら眠れるのか知っている。先生が教えてくれたんだ。

眠れないときは、僕の想像力がまだ、遊び足りないって言うてるんだって。遊び盛りの子犬みたいに、散歩に出たがってる。だから、そういうときは、繫いだ鎖を解いてあげて、扉を開けてあげるんだ。

君はこんな狭いところにとどまる必要はないんだよって、教えてあげる。

あの空に浮かぶ雲よりも、月よりも高く、高く、
宇宙の彼方までも旅していける。

あの広い海に、深く深く潜って、深海の生き物たちと友達になってなれる。

君は僕よりずっと自由だから、

僕が生きている現実はちょっと窮屈過ぎて、息をつまらせてしまうんだね。

空へ吸い込まれていく、あの赤い風船みたい…
僕は手を離す。

さあ、行っておいで。

でも、あんまり遠くに行ってはだめだよ。

ちゃんと、朝までに…僕のところへ帰ってきてね。

そして、君の見たこと、聞いたこと、感じたことを、僕に聞かせてね。

アンデルセンの「絵の無い絵本」に出てくる、月みたいに…

僕にお話を聞かせてね。

ほら、眠くなってきた。

君が開いたドアから出て行ったから。

おやすみ…

また、あした。

北条琉里

三日月は闇夜を切り裂く

郊外の廃ビルの三階。

窓際に古びた机を並べ、その一つに腰を掛ける。割れた窓から外界を覗く。

三日月が薄っすらとその存在を主張し始めている。まるで鋭利な刃物のような切っ先を、優しく眺める。きっと、触れれば鮮やかな血が滴るだろう。

しかし、空に浮かぶ美しい凶器は、やがて流れる雲に紛れて消えた。

今日は風が強いな。とても冷える。俺は手袋に包まれた両手の指先を、強く絡める。

地上に細やかな闇が舞い降りて、沈殿していく。

だが、西の空には微かな茜色を残している。

まだ早い。だから俺は動かない。

夜の底で、世界が寝息を立てる瞬間を待つ。

大地が寝静まるのは、まだ先。

そう、この静けさを、心に染み渡らせるように…

降り積もった闇をかき乱してはならない。

俺が相手にするのは、もはや理性を失った野獣に等しいのだ。

静寂に溶け込み、暗闇をこの身に纏う。

奴は知っている。俺の中に巣食う獣の存在、そして罪を。

だが、奴は知らないのだ。もしくは、怒りによって忘れているのだろう。俺は獣であると同時に、一流のハンターでもあることを。

奴は俺を裁こうと考えている。

俺は迫りくる獣を迎え撃つ準備を整えている。周到に。徹底的に。その差は明らかだ。つまり、勝負にならない。

今夜は雪が降るらしい。
降り積もる雪は、
地上に流れた赤い血を、
白く、美しく覆ってくれるだろう。
願わくば、俺の罪と悪を、
暫しの間で構わない…
覆い隠して欲しい。

突如、気配を感じる。沈静化した闇に、異物が入り込んだ。俺は窓の外枠に背面を添わせ、地上を確認。

やはり…来たか。

奴はビルの周辺を伺っている。右手に持っているのは…おそらく角材か何かだろう。

腰に指したシースナイフを確認。右手で掴み、鞘のボタンを親指で弾く。

その数秒後、地階から鈍い金属音が響いた。

奴が玄関の鉄扉を力任せに蹴飛ばした音が。想定通り。奴は逆上したままだ。

引き金は引かれてしまった。もう戻れない。

さあ、食い殺されるのは、俺か、それとも奴か。
賽は振られた。

狩の時間が始まる。

辻堂翔

あたしへ宛てた手紙 1

高校を卒業してすぐに、あたしは上京しました。

就職先は決まっていたし、住む場所も会社が用意してくれたし、一人暮らしは始めてだったけど、お料理もお掃除も小さい頃から好きだったから、そんなに苦労は感じません。

東京に来てから、半年ちょっと経ちました。

仕事は忙しいです。意地悪な人もいるし、まだまだ慣れないことばかりで、やらなくちゃいけないことも沢山あります。だから、そんなに寂しいと感じる時間ありません。

東京も寒くなってきました。北国のあたしの故郷の寒さに、少しだけ近づいた気がして、懐かしくて、嬉しくなります。でも、きつと、同じになることは無いんだろうな。

ホントのことを言うと、夜の帰り道、空を見上げると、たまに悲しくなることがあります。

東京の空には星が見えません。

あたしは星を眺めるのが大好きでした。

本当にこの空は、あたしの生まれた街へ繋がっているのかな、もしかしたら、あたしは知らないうちに、全然違う世界に一人だけ来てしまったんじゃないかって気がして、怖くなります。

東京は人が多いです。

もし東京に綺麗な星空が広がっていたら、あたしはずっと空を見上げて歩いているだろうから、あたしは周りの人に変な子だっと思われちゃうと思います。空ばかり見てて、人や建物にぶつかっちゃうかもかもしれません。

だから、東京に星が無くて良かったって思おうとしたんだけど、うまくいきません。

やっぱり、何かを我慢したり、無理矢理に自分を納得させたりして、ちよっと得するを見つけても、あとで空しくなるだけです。

今度はいつ帰れるだろう。

次に帰ったときは、もっとちゃんと星を眺めようって思います。

あたしの目に焼きつくぐらい。

瞼を閉じれば、いつでも浮かんでくるぐらい。

お父さん、お母さん。

元気にしてるかな。

もっと元気なときに、また、ちゃんとお手紙するからね。

この手紙はあたしに宛てたもの。誰にも出しません。自分で自分に、頑張れって、メールを送ってるの。

ああ、もう寝ないと。明日も仕事なんだから…

大丈夫。

きっとあたしは、

きっとあなたは、

大丈夫。

ではでは、おやすみなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2418y/>

PIECES

2011年11月21日19時33分発行